吹上二ツ塚遺跡2

福岡県小郡市吹上所在遺跡の調査　小郡市文化財調査報告書第228集

2006

小郡市教育委員会

吹上二ツ塚遺跡2

福岡県小郡市吹上所在遺跡の調査

小郡市文化財調査報告書第228集

2006

小郡市教育委員会

序

本書は、小郡市吹上において計画されました「一般県道 吹上北野線道路改良工事」に先立って、小郡市教育委員会が実施した吹上二ツ塚遺跡２の発掘調査の記録です。

調査地は小郡市の中央を南北に貫流する宝満川の東側、小郡市吹上に所在します。吹上においては、平成15年度に今回の調査地点の南側を吹上二ツ塚遺跡として調査し、狩猟に使用されたと思われる落し穴状の遺構を確認しています。

今回の調査では、古墳時代と近世の溝を各１条確認した他、防空壕を１基確認しました。

このように埋蔵文化財は、地域の歴史を明らかにするうえで欠かすことの出来ない貴重な文化遺産です。本書が文化財に対するご理解、さらには教育及び学術研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたりご協力いただきました福岡県久留米土木事務所及び発掘調査に従事された方々をはじめ、地元の多くの方々にご理解とご協力いただきましたことに厚く感謝いたします。

平成18年８月31日

小郡市教育委員会
教育長　清　武　　輝

例　　言

１. 本書は、「一般県道 吹上北野線道路改良工事」に伴い、福岡県久留米土木事務所より委託を受け小郡市教育委員会が発掘調査を行った吹上二ツ塚遺跡（ふきあげふたつづかいせき）２の報告書である。
２. 調査期間は、平成17年10月３日から同年10月31日まで実施した。
３. 調査面積は、169㎡である。
４. 本調査は、沖田正大が行った。
５. 遺跡名において使用した二ツ塚は小郡市吹上に所在することから、平成15年度調査、平成16年度報告の「干潟二ツ塚遺跡（ひかたふたつづかいせき）」を「吹上二ツ塚遺跡（ふきあげふたつづかいせき）」と改め、本調査区を「吹上二ツ塚遺跡２」とする。
６. 現地遺構実測及び遺構全体図の作成は、吉田あや子、熊本啓子、中村智恵子、的場扶美、横田雅江、山本絹子、広木 誠、沖田が行い、製図は馬田妙子が行った。
７. 遺構の個別写真及び遺跡全景写真の撮影は沖田が行い、遺物の撮影は㈲文化財写真工房 岡紀久夫氏に委託した。
８. 遺物の復元は、田中悠美子、中島ヤヨイが行い、実測は沖田が行った。
９. 本書に記載した遺構略記号は、D：溝、K：土坑、P：柱穴、Z：撹乱 である。
10. 遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。
11. 遺物・実測図・写真は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
12. 本書の執筆と編集は、沖田が行った。

本文目次

第１章　調査に至る経過と組織……1
　１　調査に至る経過……1
　２　調査組織……1
　３　調査の経過 ……1

第２章　位置と環境……2

第３章　調査の内容……4
　１　概要 ……4
　２　溝状遺構 ……4
　３　土坑……9
　４　柱穴……10
　５　防空壕……10

第４章　まとめ……12

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図（S ＝１ /25,000)……3
第２図　調査範囲図（S ＝１ /2,500)……4
第３図　遺構配置図（S ＝１ /100)……5
第４図　調査区東・南壁土層断面図（S ＝１ /50)……6
第５図　SD ‐ １・２平・断面図（S ＝１ /40)……7
第６図　SD ‐ １・２、防空壕出土遺物実測図（１～８は S= １ / ２、９は S= １ / １）……8
第７図　土坑平・断面図（S ＝１ /40)……9
第８図　防空壕平・断面図（S ＝１ /60)……10

図版目次

図版１　調査区全景、調査区より北を望む、調査区東壁土層、調査区南壁土層、SD ‐ １・２防空壕全景、SD ‐ １ベルト土層
図版２　SD ‐ ２全景、SD ‐ ２ベルト土層、SD ‐ ２土層、防空壕全景、SK ‐ ３ベルト土層調査風景
図版３　SD ‐ １・SD ‐ ２・防空壕出土遺物

第１章　調査に至る経過と組織

1. 調査に至る経過

小郡市吹上において計画された一般県道吹上北野線道路改良工事に伴い平成15年度調査地分を除く残地において平成17年７月26日付で福岡県久留米土木事務所より埋蔵文化財の有無について照会文書が小郡市教育委員会文化財課に提出された。開発原因が道路改良工事である事や、同道路改良工事に伴い当該地の南側において平成15年度に発掘調査を実施している事から平成17年８月30日にトレンチ３本を設定し当該地の試掘調査を実施し、申請面積（430.69㎡）の内220㎡ において遺跡が所在する事を確認した。

試掘成果をもとに福岡県久留米土木事務所と協議を行い遺跡が確認された220㎡ において発掘調査を実施する事となった。

発掘調査は、調査地が現行の道路より高い位置に立地する事や、西側が畑として使用されている事、現行の道路が通学路としての利用もあることから、安全を確保するため実質169㎡ において実施した。

調査期間は、平成17年10月３日から同年10月31日までである。

2. 調査組織

福岡県久留米土木事務所

	所　　長	馬場　　満
	副所長（事務）	井口　幸雄
	副所長（技術）	重富　博良
道路課	課　　長	楢原　精治
	建設係長	金子　喜年
	技術主査	山﨑　博信（調査当時）
	主任技師	佐藤　直樹

小郡市教育委員会

	教育長	清武　　輝
	教育部長	高木　良郎
文化財課	課　　長	田篭千代太
	係　　長	大石　義行（調査当時）
		片岡　宏二
	嘱託技師	沖田　正大（調査担当）
	補助員	広木　　誠
		（現 那珂川町教育委員会）

発掘従事者

黒瀬シゲ子、田中安美子、田中フジ子、福田紀美子、福田喜代子、福田佐和子、福田浪子

3. 調査の経過

調査は、平成17年10月３日より着手した。以下、調査の経過を調査日誌より抜粋する。

平成17年10月３日（月）晴れ、調査区表土剥ぎ開始、柵・プレハブ・仮設トイレ等設置。10月６日（木）晴れ、表土剥ぎ、調査機材搬入。10月７日（金）曇り時々晴れ、作業員による掘削開始、調査区壁面土層分層及び撮影。10月11日（火）晴れ、遺構検出、柱穴及び撹乱掘削。10月13日（木）晴れ後雨、柱穴・土坑・撹乱掘削。10月17日（月）晴れ、柱穴・土坑・溝・撹乱掘削。10月18日（火）晴れ、溝・防空壕掘削、調査区壁面土層図作成、D-１・２・K-３ベルト土層図作成及び撮影、測量用杭打ち。10月19日（木）晴れ、１／20遺構全体図作成、防空壕個別遺構図作成。10月21日（金）晴れ後曇り、１／20遺構全体図実測終了。10月24日（月）晴れ、全景及び個別遺構写真撮影準備。10月25日（火）曇り、全景及び個別遺構写真撮影、廃土搬出。10月26日（水）晴れ、埋め戻し、機材搬出。10月31日（月）晴れ、プレハブ・仮設トイレ等撤収、ガードレール復旧。

第２章　位置と環境

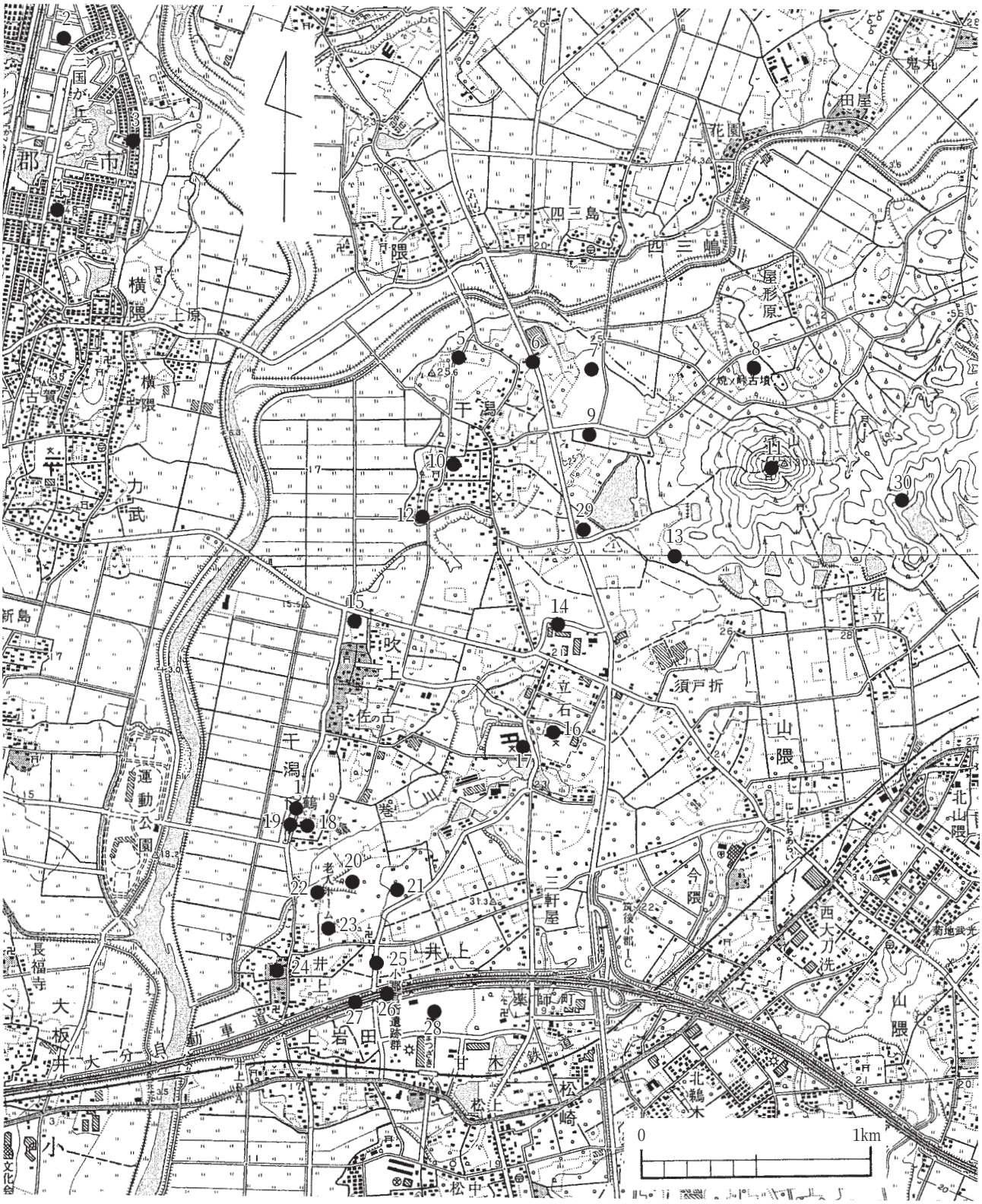
吹上二ツ塚遺跡２は、小郡市を南北に貫流する宝満川の左岸、小郡市と筑前町の境をなす城山（花立山）から派生する中位段丘の先端部に位置する。調査地の東側は、一般県道吹上北野線や宅地により削平され城山から派生する中位段丘から切り離された状態となっている。遺構検出面の標高は、16.39～16.93m である。

本調査地が所在する「二ツ塚」は、調査地の北東100m ほどの場所に高橋家家臣福田美濃種次が天文23年（1554年）に二ツ塚の地に隠居する１年前の天文22年（1553年）に現世安穏を願った一字一石経の石碑を建てた小さな塚があり、この塚の東側にも同様に石碑が建てられ小さな塚を形成し、これらの東西に並ぶ２つの塚があることに由来している。

吹上及び干潟、井上といった周辺地域は、古くからの集落であり、干潟に所在する花立山山麓は旧石器・縄文時代の散布地及び花立山古墳群として知られている。また井上に所在する井上廃寺など各時代において注目される遺跡が所在する地域である。

縄文時代の遺跡としては、干潟向畦ヶ浦遺跡（７）、吹上南立石遺跡（16）、井上小松山遺跡１・２（21）、干潟城山遺跡（９）、吹上二ツ塚遺跡（19）、干潟猿山遺跡（14）が挙げられ、各遺跡において落し穴状遺構が確認された他、干潟向畦ヶ浦遺跡では、草創期～早期と考えられる続円孔文土器や条痕文土器が確認されている。弥生時代になると遺構・遺物ともに多種にわたり数多く確認され、遺跡としては吹上・北畠遺跡（15）や干潟遺跡（６）、干潟遺跡５（５）、干潟下屋敷遺跡（12）、井上南内原遺跡（23）、井上北内原遺跡（22）が挙げられる。干潟下屋敷遺跡では、土壙墓群（一部木棺墓の可能性も想定される）や甕棺墓群が確認され、干潟遺跡・干潟遺跡５においても甕棺墓群、井上北内原遺跡では甕棺墓群、土壙墓、石蓋土壙墓、周溝状遺構が確認されている。また、集落としては干潟遺跡５、井上北内原遺跡において中期の住居跡が確認されている。古墳時代になると下鶴古墳（18）や花立山古墳群（13）、干潟下屋敷遺跡、干潟遺跡内に所在する舟底１号墳（６）、前方後方墳である焼ノ峠古墳（８、筑前町）などが城山から派生する丘陵および中位段丘上に築かれる。小郡市における古墳の築造は、宝満川右岸の三沢古墳群や津古生掛古墳（２）、横隈山古墳（４）、三国の鼻遺跡内に所在する三国の鼻１号墳（３）など多くの古墳が所在する三国丘陵及び先述した城山から派生する丘陵及び中位段丘上といった小郡市北部に集中して行われている。また、集落としては井上小松山遺跡３（20、平成18年度報告予定）や井上北内原遺跡で住居跡などが確認されている。古墳時代終末期から奈良・平安時代では、干潟城山遺跡や干潟猿山遺跡、井上廃寺（24）、井上南内原遺跡、井上東山ノ後遺跡（25）、井上薬師堂遺跡（27）、薬師堂東遺跡（26）、上岩田遺跡（28）、小郡官衙遺跡が挙げられ、上岩田遺跡では小郡官衙遺跡の前身であると思われる官衙的機能をもった施設が配置され、その中に678年「筑紫国大地震」により倒壊したと思われる基壇をもつ礎石建物が有り井上廃寺の前身であると考えられる。井上廃寺や井上薬師堂遺跡、上岩田遺跡では、捶先瓦や軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦など古代の瓦が数多く出土している。中世では、干潟中屋敷遺跡（10）や山隈城跡（11）、井上薬師堂遺跡、薬師堂東遺跡、上岩田遺跡が挙げられ、干潟中屋敷遺跡は中世の土塁跡である。山隈城は、花立山山頂に築かれた山城であり、本丸、二の丸、三の丸、空濠から構成される。1359年の大保原合戦時に小弐頼尚の本陣が花立山に築かれ、その後に山隈城として秋月種実の支城となるが豊臣秀吉の九州平定後に小早川隆景の支城となっている。近現代においては、小郡市の東に隣接する筑前町（旧夜須町・三輪町）、大刀洗町、旧甘木市（現朝倉市）にまたがる山隈原に大刀洗飛行場が建設されている。大刀洗飛行場は、大正５年（1916年）から３年がかりで建設され、軍の拠点空港のみにとどまらず国内（東京-大阪）、国外（大連）への定期便が民間航空会社により運行されている。第二次世界大戦が始まり各地で米軍による空襲が行われるなか、昭和20年３月27日を最初とし大刀洗飛行場周辺においても B29爆撃機の編隊による空襲が幾度にわたり行われている。この様な空襲の為、本調査区が所在する吹上一帯においても航空機の残骸などが降り注いでいた様である。

今回の調査区においては、古墳時代前期の溝と近世の溝、第二次世界大戦時に使用されたと思われる防空壕が確認され、調査区周辺の遺跡との関連が注目されると共に戦時下における吹上および周辺地区の様相が確認できる資料である。



1. 吹上二ツ塚遺跡２　2. 津古生掛古墳　3. 三国の鼻１号墳　4. 横隈山古墳　5. 干潟遺跡５　6. 干潟遺跡
7. 干潟向畦ヶ浦遺跡　8. 焼ノ峠古墳　9. 干潟城山遺跡　10. 干潟中屋敷遺跡　11. 山隈城跡　12. 干潟下屋敷遺跡
13. 花立山古墳群　14. 干潟猿山遺跡　15. 吹上・北畠遺跡　16. 吹上南立石遺跡　17. 吹上赤土遺跡　18. 下鶴古墳
19. 吹上二ツ塚遺跡　20. 井上小松山遺跡３　21. 井上小松山遺跡１・２　22. 井上北内原遺跡　23. 井上南内原遺跡
24. 井上廃寺　25. 井上東山ノ後遺跡　26. 薬師堂東遺跡　27. 井上薬師堂遺跡　28. 上岩田遺跡　29. 干潟遺跡Ⅱ
30. 山隈窯跡群　（※本文中記載の番号と一致）

第１図　周辺遺跡分布図（S ＝ 1/25,000）

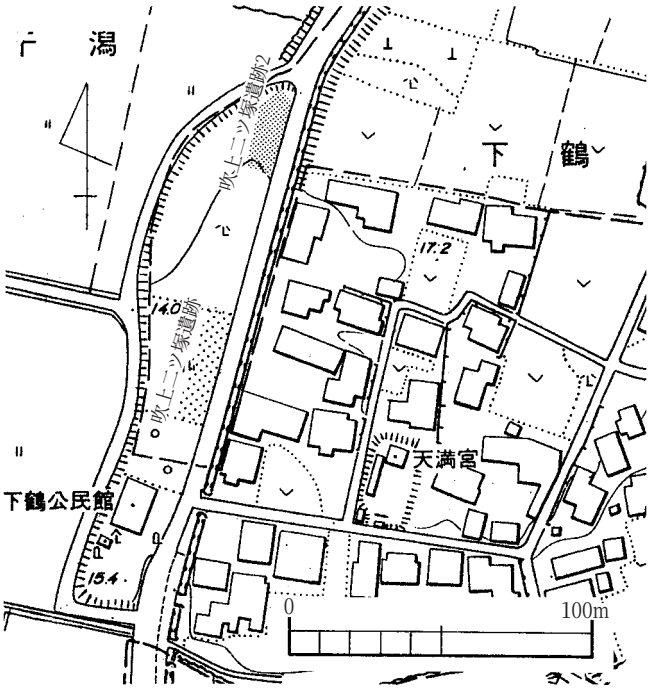
第３章　調査の内容

1. 概要

調査地は、城山（花立山）から派生する中位段丘の縁辺部に位置する。標高は、16.390～16.930m である。西側に宝満川が流れ、宝満川と調査地の間は一段低く、現在は耕作地として利用されている。調査区東側は、宅地及び県道吹上北野線により削平され孤立した状態になっている。また、調査区自体も近年まで畑として利用され、それ以前にも削平を受けているため調査区内の北側部分は撹乱となり、全体的に遺構の残存状況は良好とは言えない状況である。

調査区の設定は、東側道路が通学路として利用されている事や調査時期が稲の収穫時期である10月であり作業車の通行が多い事などから、安全を考慮し調査区と道路の間１ m 程は掘削せずに調査を行った。基本層序は、表土及び埋土、黒褐色弱粘質土、暗褐色弱粘質土の下、地山となる。

遺構は、地山上面で検出した。検出した遺構は、古墳時代前期の溝１条、近世の溝１条、第二次世界大戦中に作られたと思われる防空壕１基、土坑６基、柱穴16基である。



第２図　調査範囲図（S ＝ 1/2,500）

出土遺物は、古墳時代の土師器、近世の陶磁器や瓦、昭和初期の鉄釘（鎹）、貨幣、銃弾の薬莢であり、溝や防空壕、撹乱からの出土で遺物量はかなり少ない状況である。

2. 溝状遺構

SD－１（第５図、図版１）

SD－１は、調査区南側で東西方向に検出した。SD－２に西側、防空壕に南側を切られる。検出した規模は、長さ６ m、最大部幅1.29m、最狭部幅0.57m、最深部0.35m、最も浅い部分で0.07m であり、西に向かい浅くなる。断面は、緩やかなＵ字形を呈する。埋土内に遺物はほとんどなく、二重口縁壺の口縁部、土師器甕の頸部から胴部にかけての小片のみであった。埋土は、暗褐色シルトが堆積した後に黒褐色シルトが堆積し人工的な埋め戻しではなく自然堆積と思われる。

出土遺物（第６図、図版３）

１は、土師器二重口縁壺の口縁部である。法量は、口径17.6cm（復元）、残存高3.6cm である。焼成は、良好でにぶい黄橙色を呈し、胎土には１～２ ㎜ の砂粒を含む。調整は、内外面共に横ナデである。古墳時代前期の所産と思われる。

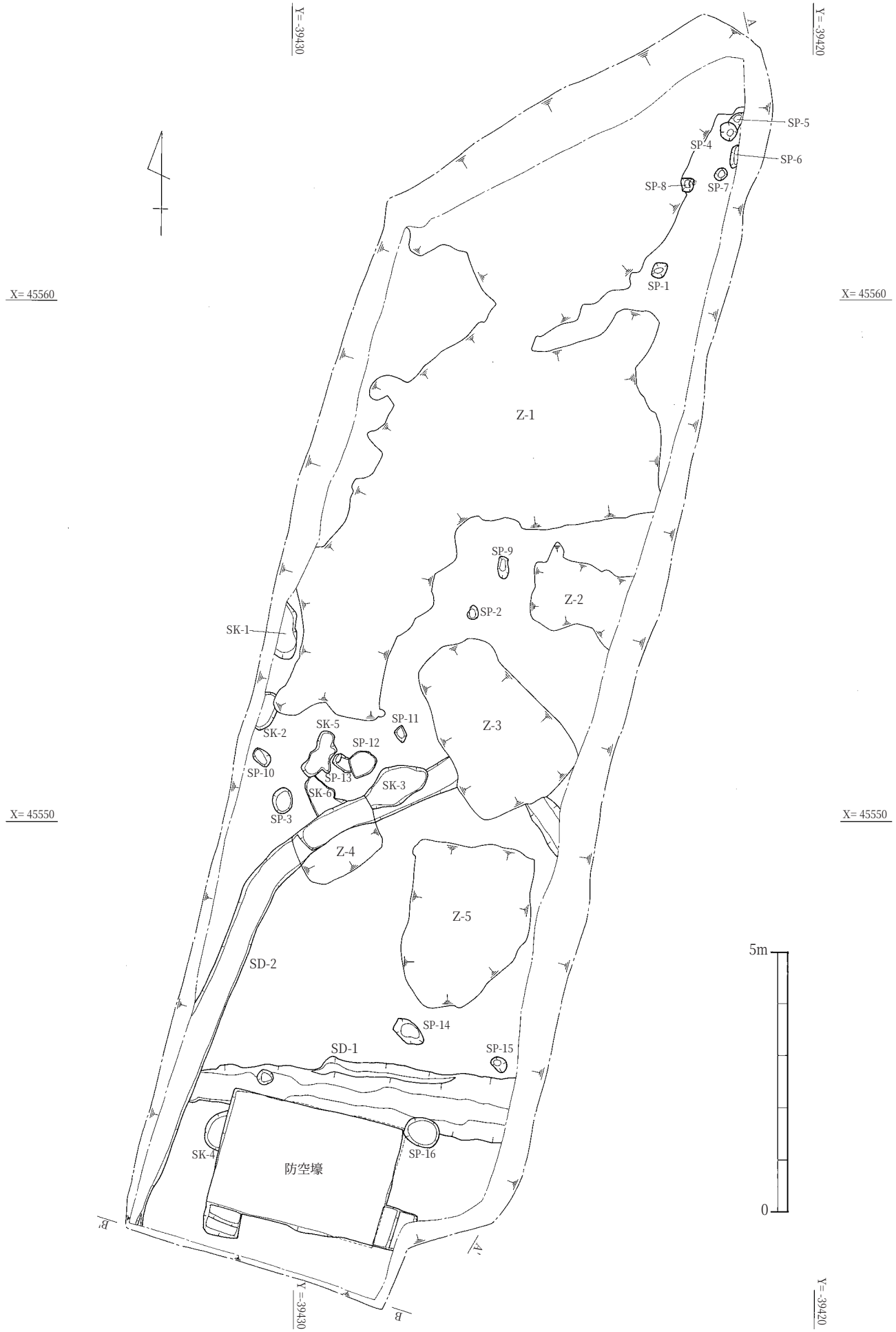
２は、土師器甕である。残存状況は、口縁部を欠損し頸部から胴部にかけてである。焼成は、良好で内面はにぶい黄橙色、外面は橙色を呈し、胎土に１～２ ㎜ の砂粒を含む。調整は、外面頸部横ナデ、胴部ハケメ後ナデ、内面頸部ナデ、胴部ヘラケズリである。古墳時代前期の所産と思われる。

SD－２（第５図、図版１・２）

SD－２は、調査区南西角から中央にかけて検出した。調査区西壁にかかり、SK－３、Z－３・４に切られ、SD－１を切る。SD－２は、調査区南西角から Z－４にかけてほぼ直線的に伸び、Z－４付近で緩やかに曲線を描き Z－３に至る。また、Z－３から南東方向に調査区東壁に直線的に伸びるため、Z－３部分で屈曲し角を作るものと思われる。検出した規模は、調査区南西角から Z－３の区間で長さ約11.2m、幅約0.5～0.6m、最深部で0.38m、最も浅い部分で0.26m であり、Z－４内で約0.15m 程の段が付き、床面は２段になっている。断面は、長方形を呈する。出土遺物は、ほとんどなく瓦小片２点のみの出土であった。

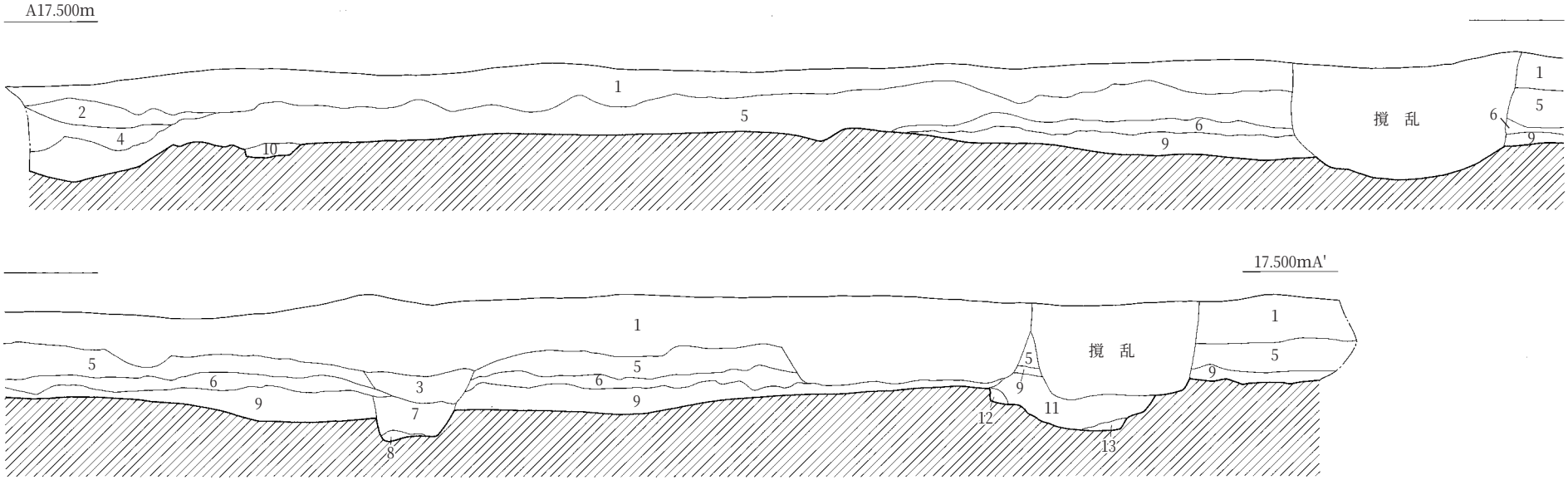
出土遺物（第６図、図版３）

３は、平瓦片である。小片で、厚み1.85cm である。焼成は良好で、外面は暗灰色、胎土は灰白色を呈する。



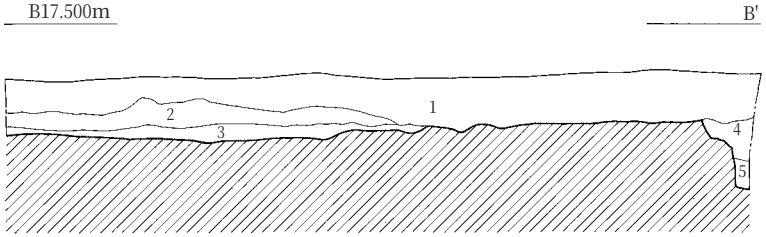
第 3 図　遺構配置図（S ＝ 1/100）

調査区東壁



1. 表土
2. 埋土
3. 10YR3/2黒褐色弱粘質土（φ1mm砂粒多く含む、しまりやや悪い）90%＋10YR5/4にぶい黄褐色弱粘質土ブロック（φ1～3cm程度、よくしまる）10%
4. 7.5YR2/2黒褐色弱粘質土（φ1mm砂粒含む、よくしまる）80%＋10YR6/3にぶい黄橙色粘質土ブロック（φ0.5～4cm、よくしまる）20%
5. 7.5YR3/2黒褐色弱粘質土（φ1～2mm砂粒含む、よくしまる）
6. 10YR2/2黒褐色弱粘質土（φ1mm砂粒含む、よくしまる）
7. 10YR2/3黒褐色弱粘質土（φ1～2mm砂粒含む、しまりやや悪い）90%＋10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック（φ0.5～8cm、よくしまる）10%　SD-2埋土
8. 10YR2/2黒褐色弱粘質土（φ1mm砂粒含む、しまり悪い）SD-2埋土
9. 10YR3/3暗褐色弱粘質土（φ1mm砂粒含む、よくしまる）
10. 10YR4/4褐色弱粘質土（φ1～2mm砂粒含む、よくしまる）　SP-6埋土
11. 10YR2/2黒褐色弱粘質土（φ1mm砂粒含む、よくしまる）　SD-1埋土
12. 10YR3/4暗褐色弱粘質土（よくしまる）　SD-1埋土
13. 10YR2/3黒褐色弱粘質土（φ1mm砂粒含む、よくしまる）70%＋10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック（φ2cm程度、よくしまる）30%　SD-1埋土

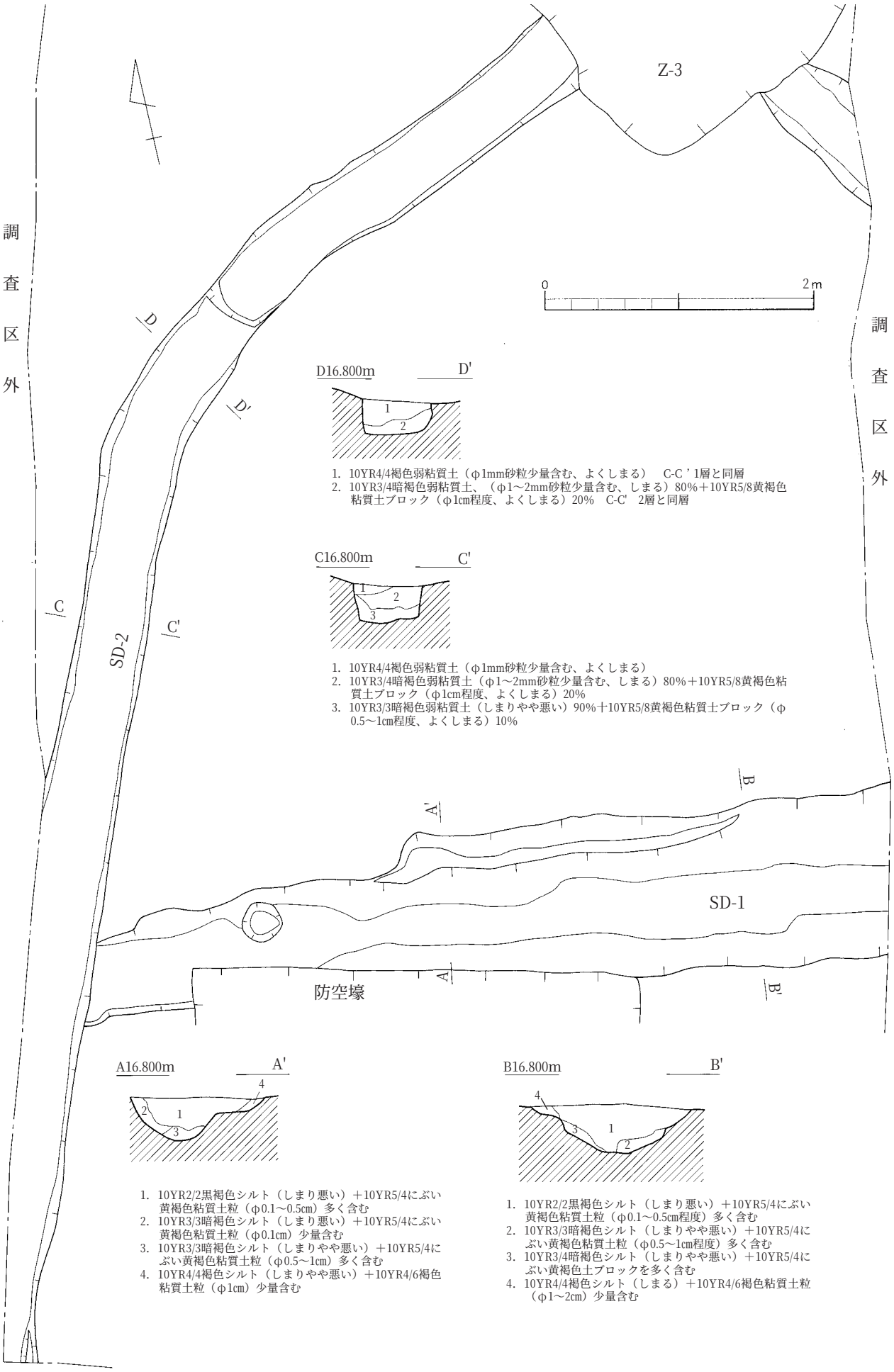
調査区南壁



1. 表土
2. 10YR3/2黒褐色弱粘質土（φ1～2mm砂粒含む、よくしまる）に10YR6/6明黄褐色粘質土粒（よくしまる）が少量混ざる
3. 10YR2/2黒褐色弱粘質土（φ1～2mm砂粒少量含む、よくしまる）
4. 10YR3/2黒褐色弱粘質土（φ1～5mm砂粒多量に含む、φ5cm礫少量含む、しまる）に2.5Y8/2灰白色粘質土ブロック（φ1cm程度、よくしまる）が少量混ざる　SD-2埋土
5. 10YR2/2黒褐色弱粘質土（φ1～2mm砂粒含む、しまりやや悪い）SD-2埋土

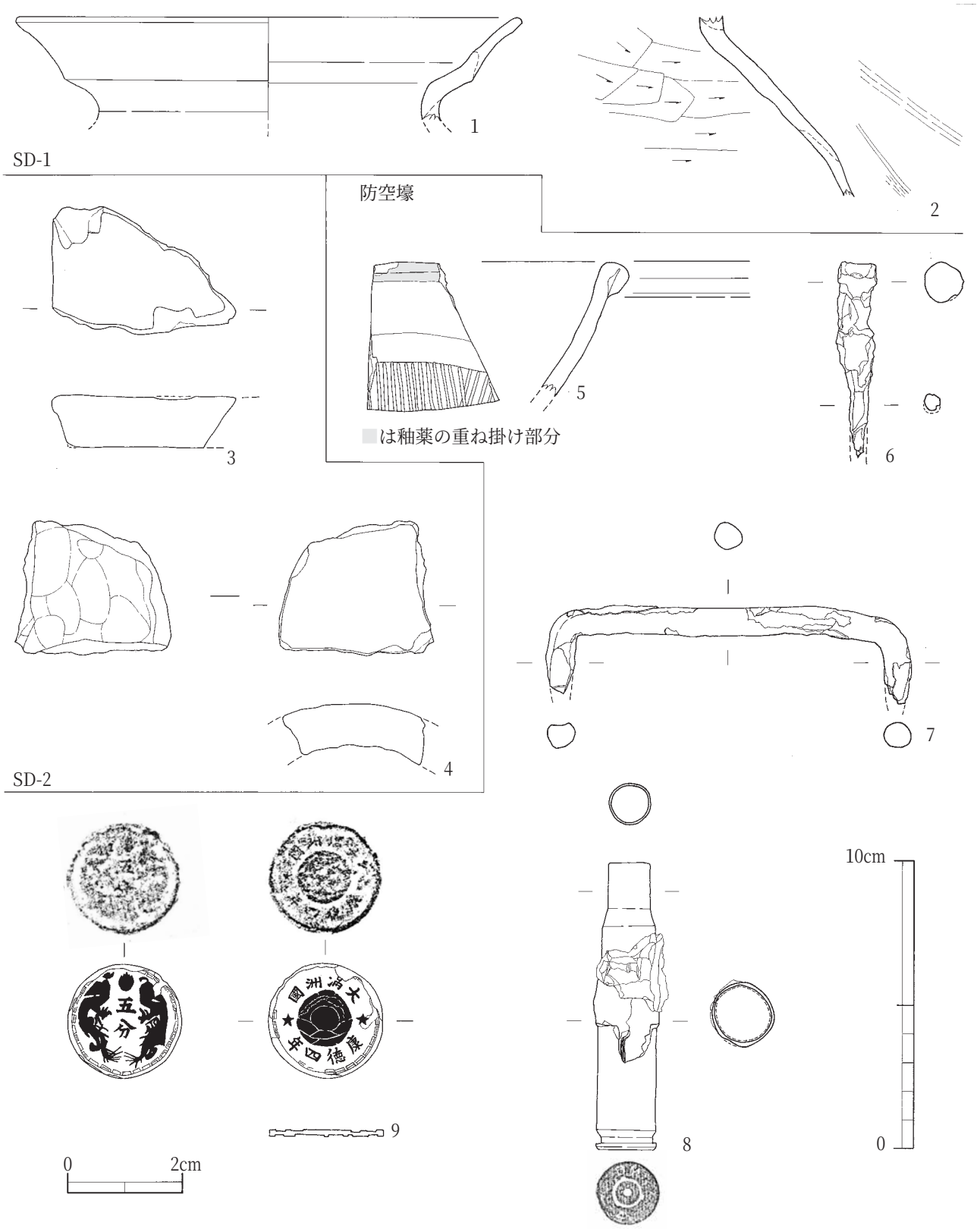
0　2m

第４図　調査区東・南壁土層断面図（S＝1/50）



第５図　SD‐１・２平・断面図（S=1/40）

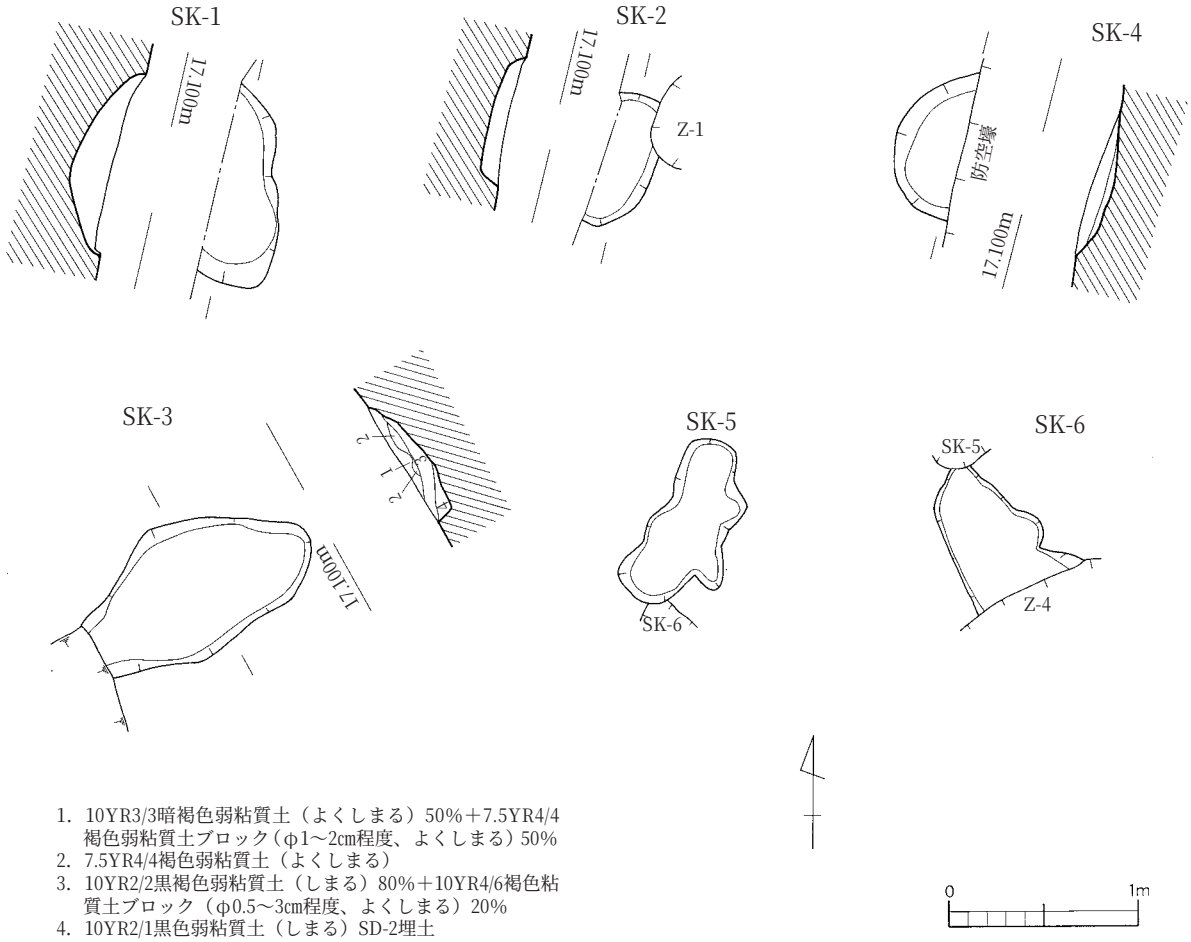
４は、丸瓦片である。小片で、厚み1.45cmである。焼成は良好で、浅黄橙色を呈する。外面はナデ、内面は指押さえによる調整が施される。



第６図　SD‐１・２、防空壕出土遺物実測図（１～８はＳ＝1/2、９は1/1）

3. 土坑

土坑は、調査区内において６基検出したが、残存状況が悪く遺物は皆無であった。



第７図　土坑平・断面図（S ＝ 1/40）

SK-１（第７図）

SK-１は、調査区西壁にかかる状態で検出した。検出した規模は、長軸方向で約１ m、短軸方向で約0.37m、深さ0.23m である。調査区にかかるため全様は明らかではない。

SK-２（第７図）

SK-２は、SK-１の南側で検出した。SK-１同様に調査区西壁にかかり、Z-１に切られる。調査区にかかるため全様は明らかではないが、検出した規模は長軸方向0.73m、短軸方向0.28m、深さ0.1m であり、床面は平坦である。

SK-３（第７図）

SK-３は、調査区の中央付近で検出した。SD-２を切り、Z-４に切られる。検出した規模は、長軸方向1.27m、短軸方向0.73m、深さ約0.15m である。床面は、緩やかに中央に向かい窪む。

SK-４（第７図）

SK-４は、調査区南側で検出した。防空壕の西壁に切られる。検出した規模は、長軸方向0.8m、短軸方向0.35m、深さ0.11m である。断面は、浅い擂鉢状を呈する。

SK-５（第７図）

SK-５は、調査区中央付近、SP-12･13の西側で検出した。SK-６を切る。検出した規模は、長軸方向0.94m、短軸方向0.35m、深さ0.11である。

SK-６（第７図）

SK-６は、調査区中央付近で検出した。SK-５、Z-４に切られる。検出した規模は、長軸方向0.73m、短軸方向0.61m、深さ0.09mである。

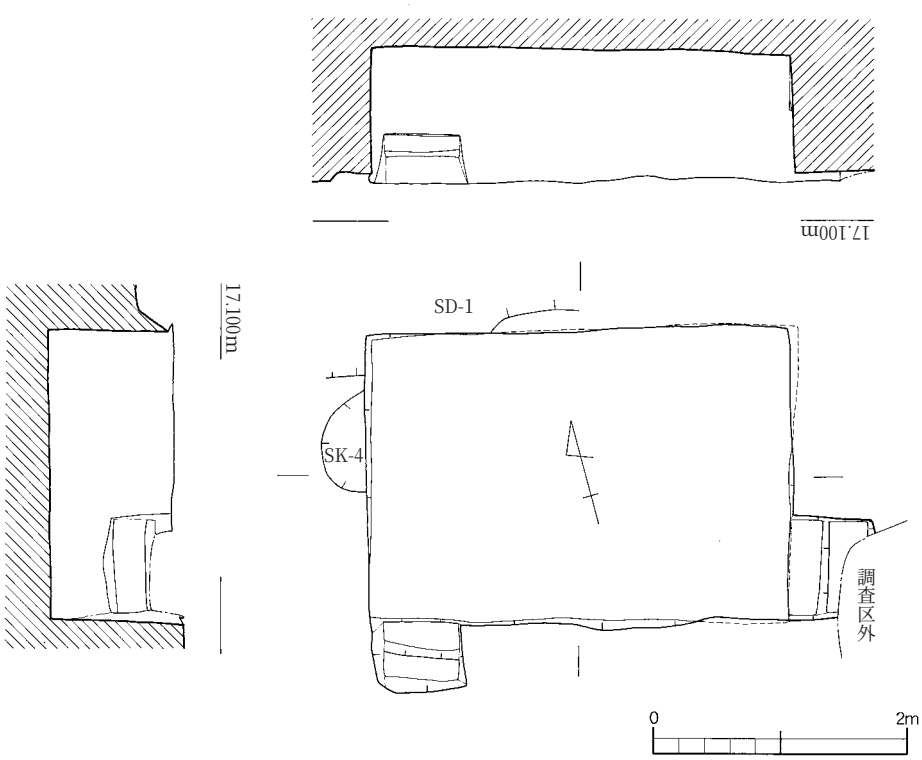
4. 柱穴

柱穴は、調査区内全域で16基検出した。出土遺物が皆無である事や、調査区内が撹乱により大きく削平されている事から、各柱穴の時期や対応関係などは不明である。

5. 防空壕

防空壕（第８図、図版２）

防空壕は、調査区南側で検出した。SD-１、SK-４を切り、防空壕の東壁に付く階段部分が調査区にかかる。平面プランは、長方形プランを呈し、東西に長軸方向をとる。床面は、ほぼ平坦に成形され、壁面もほぼ垂直で平坦に成形されている。南東角から東方向、南西角から南方向に階段が地山成形により作られている。検出した階段は各２段である。検出した上端の規模は、南北方向2.27～2.36m、東西方向3.32～3.34mであり、階段部分を含めると南北方向2.81m、東西方向3.97mである。床面は、南北方向2.17～2.31m、東西方向3.27～3.34mである。深さは、１～1.08mであり、西に向かい緩やかに傾斜している。南西角階段は、各段は長方形プランを呈し、上から１段目は長軸方向0.6m、短軸方向0.19m、２段目は長軸方向0.6m、短軸方向0.22mであり、段差は上端から１段目約0.2m、１段目から２段目約0.14m、２段目から床面約0.68mである。南東角階段も各段は長方形プランを呈し、上から１段目は長軸方向0.7m、短軸方向0.3m、２段目は長軸方向0.75m、短軸方向0.2～0.26mであり、段差は上端から１段目約0.14m、１段目から２段目約0.25m、２段目から床面約0.44mである。各階段共に２段目から床面までの段差が高く箱などの踏み台を使用していたことが考えられる。出土遺物は、床面より鉄釘や鉄製鎹、貨幣、薬莢、陶磁器小片が出土している。



第８図　防空壕平・断面図（S=1/60）

出土遺物（第６図、図版３）

５は、陶器擂鉢の口縁部片である。焼成は良好で、内外面共に施釉を行うが口唇部のみ明緑灰色を呈し釉薬の重ね掛けを行っている。施釉部分においては、内外面共に褐色、口唇部のみ明緑灰色を呈する。内面は、口唇部の約2.3cm 下より釉剥ぎを行い露胎する。釉剥ぎ開始部分より約１ cm 下から櫛目が施される。内面露胎部分は、明赤褐色を呈する。口縁部は、外面に折り返す事により成形されている。

６は、鉄釘である。先端部を欠損する。残存長6.8cm、最大幅1.35cm、最小幅0.65cm、重さ10.6ｇである。

７は、鉄製の鎹である。両先端部を欠損する。全長12.7cm、幅１ cm、重さ58.5ｇである。

８は、銃弾の薬莢である。機関銃及び戦闘機等に搭載される機銃において使用されたものと思われる。口径1.4cm、全長10cm、最大幅2.05cm、重さ61.5ｇである。中央部に銃弾同士を連結する為と思われる鉄製のリング及びフック状の金具が残る。底面には、「ＤＭ」、「４」の文字が刻印されている。

９は、五分白銅貨である。直径２ cm、厚さ１ ㎜、重さ2.8ｇ、材質は銅とニッケルである。表面中央に「五分」の文字があり、文字を囲む様に龍文が施される。裏面には、「大満洲国★康徳四年★」の文字があり、表裏ともに縁の内側に雷文状の模様が施されている。全体的に劣化が進み、摩滅している部分が多い。満州国の貨幣であり、康徳四年（1937年、昭和12年）発行である。

第４章　まとめ

今回の調査で検出した遺構は、先述した様に溝状遺構２条、土坑６基、柱穴16基、防空壕１基であり、出土遺物は溝状遺構や防空壕からの数点を数えるだけで、土坑や柱穴からは皆無であった。調査中に周辺の方々から昭和初期の調査地の様子を聞く事が出来、当時は調査地の南側には住宅が建ち、調査地点は庭および裏山的な様相を示し、今回検出した様な防空壕が数基隣接して築かれていた様である。戦後に大きく削平を受けたものと思われ、近年まで調査区およびその周辺は墓地や畑として利用され、今日においても調査地の西側隣接地は畑となっている。

この様な状況の中で検出した２条の溝状遺構の内１号溝（SD‐１）は、古墳時代前期のものと思われ、土師器二重口縁壺の口縁部が出土している。SD‐１は、直線的に東西方向に検出し西側で若干南に屈曲する様ではあるが、調査区内に同時期かつ SD‐１に伴う遺構が確認出来ないため明確な用途、機能は不明である。しかし、本調査区が所在する中位段丘上には南東に約120m ほどの地点に組合せ式の箱式石棺を主体部とし四獣鏡１面、鉄鏃５点、鉄剣１本、鋳造袋状鉄斧１個が出土した下鶴古墳があり、さらには谷を挟み南東側の中位段丘上に井上小松山遺跡３で古墳時代の住居跡が確認されている。また、これら遺跡の所在する中位段丘は城山（花立山）から派生しており、城山の南麓には古墳時代後期の花立山古墳群が所在する他、舟底１号墳が本調査区の所在する段丘と分かれ城山から西に派生する段丘上に位置するなど多くの古墳時代の遺跡が周辺に所在している。特に近接地に下鶴古墳が所在することや、段丘の先端部という立地的な条件などから古墳等の墳墓が存在する可能性も考慮したうえで周辺遺跡との関係を考える必要があると思われる。

近年、小郡市における埋蔵文化財発掘調査において今回同様に防空壕が確認される事例が少量ではあるが見られ、小郡市三沢に所在する三沢北中尾遺跡においても遺構図の作成など記録作成が行われている。小郡市の西側には、大刀洗町と筑前町（旧夜須町・三輪町）があり大正５年から同８年にかけ大刀洗町に陸軍の北部九州における拠点空港として大刀洗飛行場が建設され、昭和４年から同11年にかけて一部を民間航空会社の飛行場としても使用されている。また、第二次大戦の激化により昭和18年に旧夜須町に大刀洗北飛行場が建設されている。大刀洗飛行場及び大刀洗北飛行場の建設に伴い飛行場周辺の小郡市や甘木市においても鉄道や道路の整備が急速に行われ、飛行場関連施設として甘木市に飛行学校、小郡市に燃料貯蔵施設や射撃訓練場、練兵場が設置されたほか、松崎宿旅籠油屋など多くの施設や民家が隊員の宿舎として使用されている。第二次大戦下では小郡市においても繰り返し行われた大刀洗空襲に伴い爆撃を受けており三井郡立石村立立石国民学校（現 小郡市立立石小学校）の児童にも犠牲者を出している。本調査区が位置する吹上は、軍の物資が隠されていた小郡市今隈や井上、花立山のふもとに設置された射撃訓練場などに近く、頻繁に空襲が行われ、そのため数多くの防空壕が作られていた様である。調査地周辺の方々によると昭和初期の周辺の状況は、大刀洗空襲に伴い戦闘機の破片などが多く上空より降ってきていた様で、今回防空壕から出土した薬莢も同様に上空から落ちてきたものとして理解でき、吹上地区周辺における空襲の激しさを物語る資料である。現在、埋蔵文化財の調査において、防空壕などの戦跡はあまり取り上げられる事はないが、今後この様な戦跡遺構が確認された場合、時間的余裕がある時に限られるかもしれないが、現在の生活基盤を築いた昭和初期から戦後の様子を伝える一資料として遺構図や写真など記録を残し、伝えていく必要があるのではないかと思う。

最後になりましたが今回の調査にあたり地元の多くの方々にご理解とご協力を賜りましたうえ、調査地周辺の様子について詳しくご教授いただきましたことに厚くお礼申し上げます。

図版１

調査区全景（北から）

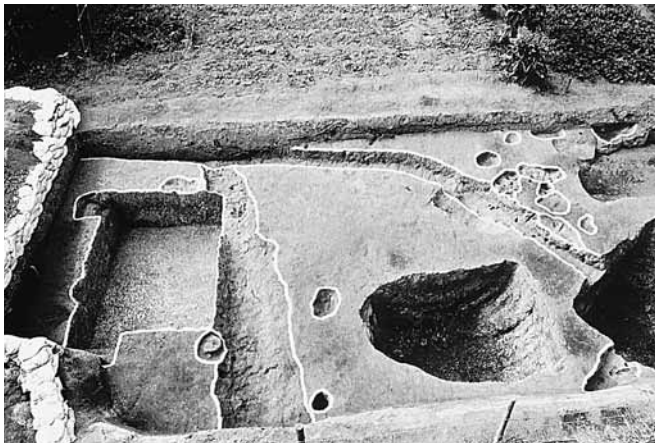
調査区全景（南から）

調査区より北を望む

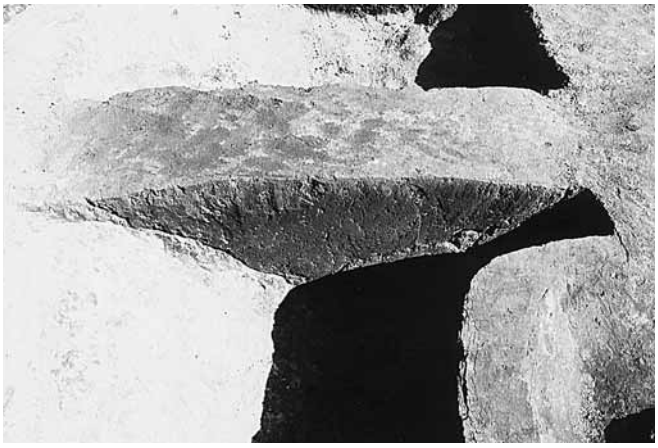
調査区東壁（中央部）土層

調査区東壁（北側）土層

調査区南壁土層



SD‐1・2、防空壕全景（東から）



SD‐1ベルト土層（A‐A'）

SD‐２全景（南から）

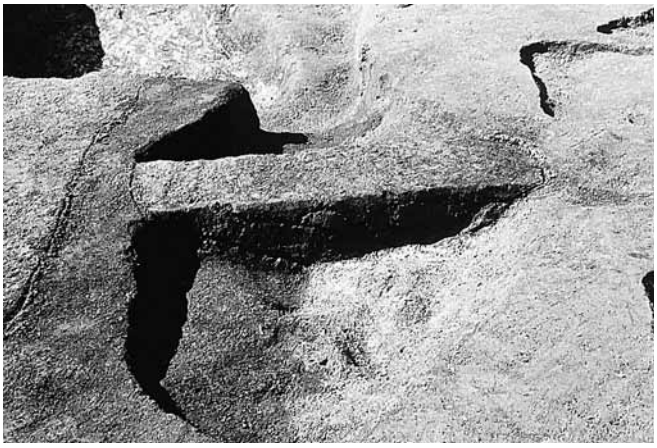
SD‐２ベルト土層（C‐C'）

SD‐２ベルト土層（D‐D'）

SD‐２土層（調査区南壁）

防空壕全景（北から）

防空壕全景（西から）



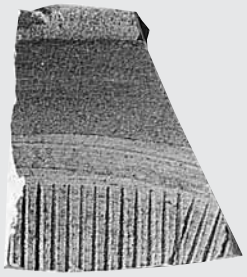
SK‐３ベルト土層（北から）

調査風景（北西から）

図版３

６－１

６－２



６－５

６－９

６－９

６－３

６－４

６－８

６－７

６－６

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふきあげふたつづかいせき２
書名	吹上二ツ塚遺跡２
副書名	福岡県小郡市吹上所在遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第228集
編著者名	沖田正大
編集機関	小郡市教育委員会　　小郡市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒838－0106　福岡県小郡市三沢5147－３　　ＴＥＬ0942－75－7555
発行年月日	2006年８月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふきあげふたつづか 吹上二ツ塚 いせき 遺跡２	おごおりしふきあげ 小郡市吹上 721-8,721-21, 721-22	40216		33° 24′ 36″	130° 34′ 33″	2005.10.03 ～ 2005.10.31	169㎡	道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吹上二ツ塚 遺跡２	集落	古墳時代前期 近世 近代	溝状遺構　２条 土坑　６基 柱穴　16基 防空壕　１基	土師器 瓦 陶磁器 鉄製品（釘、鎹） 薬莢 貨幣	溝状遺構から古墳時代前期の土師器二重口縁壺が出土

吹上二ツ塚遺跡２

小郡市文化財調査報告書

第228集

平成18年８月31日

発行　小郡市教育委員会

発行　福岡県小郡市小郡255－１

印刷　片山印刷有限会社

小郡市祇園１丁目８－15